

## 書 評

大石 和欣著『家のイングランド  
——変貌する社会と建築物の詩学』  
(名古屋大学出版会、2019年)



福原 俊平

コロナ禍による世界的なステイ・アット・ホームは、世界の人々に家の意味や価値を改めて感じさせたかもしれない。家や建造物には、雨風をしのぐという根本的な機能だけではなく、より大きなものを人々にもたらす。それは個人や家族の愛着や思い出があれば、より歴史的で、文化的な意味合いもある。例えば、観光旅行に建築は欠かせない。イギリスで言えば、宮殿やカントリー・ハウスなど、様々な歴史的建造物が多く観光客を集め、「イギリスらしさ」を感じさせる。しかし、このイギリスらしさを無批判に受け入れ、イメージの消費で済ませてしまうことの問題点は、昨今のイングリッシュネス研究によって明らかになっているところである。

本書はサブタイトルを「変貌する社会と建築物の詩学」としているように、英国社会の歴史的背景を踏まえた形で建築と文学を論じている。とりわけ、ピエール・ブルデューの「ハビトゥス」の概念に依りながら、生きられた家としての建築を探求している。ハビトゥスとは「教育や階級、文化資本を通して構築される歴史的な生態的特性」(6)であり、本書が焦点を当てるのは、人と建築物の相互作用であるという。建築物が個人の身体に作用して習慣や習性を形成する一方、その住人によって建築物には変化が加えられていく。本書では、19世紀から20世紀にかけての建築と文学に関する主要なテーマをカバーしながら、イギリスらしさの光と影、そしてその変遷を論じている。1909年に出版された『イングランドのコテッジ・ホーム』という挿絵入りの本の紹介によって本書は始まるが、それが本書の問題意識の優れた導入となっている。その問題意識と関連するのは、特に次の二点であるだろう。第一には、『イングランドのコテッジ・ホーム』で描かれ

ているのは、ステレオタイプ的なイギリスらしさであるということ。第二に、そのイギリスらしい建築物の多くが出版時には失われていたということである。

前者については、第4章において詳しく論じられている。イングリッシュでピクチャレスクな農家屋としてのコテージとは、「人工的に構築され、メディアによって演出され、さらに文学と絵画を通して理想化され、時には投機や売買の対象として市場価値を付与されることでできあがったイメージ」(174) であると明瞭に述べられているように、イギリスらしさというものは、社会における言説や経済の流通システムにおいて発生する人工的な構築物である。本書では、ヴィクトリア朝の中世趣味とネオ・ゴシック建築、田園的なコテージ、カントリー・ハウスとその衰退、ジョン・ベッチャマンのヴィクトリア朝建築礼賛などが主なテーマとなっている。19世紀から20世紀にかけて、ある建築がイングリッシュなものだとされるとき、そこにどのような歴史的・社会的な背景があり、その言説の中で文学(者)がどのような役割を演じたかを描き出していると言えるだろう。

二点目である、『イングランドのコテージ・ホーム』の出版時にはイギリス的なはずの農家屋の多くが失われていたという事実は、イングリッシュネスにはある種の影がついてまわることを示唆している。その影には様々な形があるが、一つには社会変化の負の側面がある。第1章ではヴィクトリア朝におけるスラム街が取り上げられている。言うまでもなく、スラムはヴィクトリア朝社会における大問題であったが、本書ではロバート・ルイス・ステイーヴンソン『ジキル博士とハイド氏』(1886) やブラム・ストーカー『ドラキュラ』(1897) における建築描写をスラムの問題と関連付けて論じている。スラムと同様に産業化がもたらしたものには工場もある。ウィリアム・ブレイクのように工場を悪魔的なものととらえた反応はよく知られているが、廃墟趣味においてピクチャレスクが重視されたように、ヴィクトリア朝の言説において、工場群をピクチャレスクなものとしてとらえる向きもあったことも紹介されており興味深い。

スラムと貧困問題に続いては、郊外 (suburbia) を舞台とする小説群が登場する。産業革命は貧困層だけではなく中流階級の拡大をもたらしたが、郊外とは中流階級の理想や憧れと現実が入り混じった場所である。第3章

は、シャーロック・ホームズものやジョージ・ギッシングからウィリアム・ペット・リッチやT. H. クロスランドなどの現代ではなかなか読まれない小説において描かれる郊外を取り扱っている。さらに、夏目金之助(漱石)のロンドン郊外流浪生活についても紹介されており、郊外というものの多様な側面が論じられている。郊外には、中流階級の人々が都市のスラムの醜悪さから逃れ、緑あふれるピクチャレスな住宅を作り上げようとした面がある。そのような流れの中で興味深い存在が、田園都市という計画である。第4章において田園都市も論じられているが、エベネザ・ハワードが提唱したこの理念は、1903年に着工されたレッチワースの誕生をはじめとして、世界的に影響を与えた。田園 (garden) と都市 (city) を兼ね備えた場所をほとんど何もない郊外に創出しようとする試みは、憧れの強さとそこに潜む空疎さを浮き彫りにしているだろう。

イギリスらしさについてまわる影には、不在と喪失もある。過ぎ去った過去や失われつつあるものへの想いが建築物を輝かせる。ヴィクトリア朝のネオ・ゴシック様式の人気は、中世の共同体への憧憬が背後にある。そして、そのような憧憬をもたらしたのは、産業化した社会における功利主義や自由主義への違和感である。現在という時代に欠けているものを求めて、過ぎ去った時代が理想化される側面がある。第2章において論じられているのは、ジョン・ラスキンが『ヴェネツィアの石』(1851-53) などにおいて論じたように、あるいはオーガスタス・ピュージンの『対比』(1836) やトマス・カーライルの『過去と現在』(1843) という書名からも読み取れるように、現在との対比において中世という時代は想起された。中世が自然と調和した生活が行われた時代とされるのは、もはやそれが失われてしまったという感覚があるからである。例えば、ピュージンが救貧院を中世の病院・修道院と対比するとき、現代の貧困や功利主義的な醜悪さへの批判があった。

不在と消失の影は、カントリー・ハウスを語る上で欠かせない。カントリー・ハウスはイギリス的な建築とされると同時に、カズオ・イシグロが『日の名残り』(1989) で描き出したように、過ぎ去った時代への郷愁がつきまとう。カントリー・ハウスを舞台とした文学には長い系譜があるが、このような哀感を帯びるのは、多くのカントリー・ハウスが過去に属している

ためである。第5章では、20世紀前半におけるカントリー・ハウスやステートリー・ホームに潜む不安や空疎さが論じられている。大石によると、カントリー・ハウスの消滅が特に多かったのは、1930年代の戦間期と戦後の1950-60年代である。イーヴリン・ウォーの『ブライズヘッド再訪』(1945)は、この喪失のテーマを前景化した好例である。主人公のチャールズ・ライダーの職業が、取り壊されていく歴史的建築物を描く建築画家であるということ。そして、再訪するブライズヘッドは、もはや駐屯地として軍事利用されているということ。そのような中で、ブライズヘッドを舞台とした上流階級の生活が回想される。所有者が社会階層として衰退し、多くの邸宅の取り壊しが進んでいく中で、それを描いた画集が中流階級を中心に人気を博するという事実は皮肉であるが、それがイングリッシュネスというものの重要な側面を表しているのだろう。ダフニ・デュー・モーリエ『レベッカ』(1938)においても、カントリー・ハウスは最終的に焼失するが、そこで暮らしていた語り手が抱くのは、館が「空っぽの貝殻」であるという感覚である。ヴァージニア・ウルフ『ダロウェイ夫人』(1925)には戦間期の不安が見られることはよく知られているが、大石はパーティの失敗をおそれる夫人の心理の背景に、上流階級の館が次々と消えている事実、すなわち舞踏会を行う舞台となる建築物が次々と消えていった社会情勢を見出している。D.H.ロレンス『チャタレイ夫人の恋人』(1928)における「イングランド、わたしのイングランド。だが、どちらがわたしのイングランドなのだろう。」(241)というコニーのことばは、イングリッシュネスの重要な問題を提示するが、産業の隆盛による農業中心主義の上流階級の没落など、建築は変貌する英国社会のダイナミズムの光と影から切り離すことができない。

このように建築には社会の変貌が刻み込まれている。最終章では、建築評論家でもあった詩人ジョン・ベッチャマンを取り上げているが、ベッチャマンはヴィクトリア朝の建造物への強い愛着を示した。大石はベッチャマンの建築の詩学を「複合混成態 (conglomerate)」をことばで表現する。歴史の積み重ねによって、新しいものを取り込み、パランプセストのように複数の層を構成しながら、あるいはモザイクを形成しながら、包含された状態を指している。そのような点で、移り変わるイギリス社会とその建築を論じたこの書物を締めくくるにふさわしいテーマのように思われる。全

体的に、丹念な調査と博識を備えた正統的なアプローチの仕事であり、川崎寿彦の『庭のイングランド』を意識したタイトルに値する研究書だと言えるだろう。

——福岡大学准教授